

---

# Zombie@Lonely

Oji夏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Zombie@Lonely

### 【コード】

N0532Z

### 【作者名】

Oji夏

### 【あらすじ】

物語の主人公として転生したらゾンビだった！ 主人公は神への復讐を誓うも死ななければ会うことは出来ない。だがゾンビだから死ねない。だから死ぬために生き返る！ そのために生存者を探の旅に出る主人公。生き物のいない世界で彼は何を見るのか。

【俺】

そつだ、まずは俺の事を紹介しなきゃならない。

「アウアー」

名前は日本人としちゃありふれてるだろ？だが自慢出来る点があるんだ。

「アウアウアー」

更に聞いて驚け。

「オウボロアー」

凄いだろ？

「アアアアアア！！！！」

俺は、鏡の前で必死に自己紹介の練習を繰り返していた。

@エピソード1 【俺】

残念な姿を否応無く映す鏡から離れ、俺は頭を掻き毟る。ネツチ

ヨリと手にこびり付いた黒い紐の束。これは俺の貴重な髪の毛である。男でありながらその艶と直毛が少なからず自慢であったのに。今や油まみれで過去の栄光は見る影すらねえ。

「アーオ……」

残り何本だろう……。人間の髪の毛は10万本ある、てどこかの本で読んだけど残り半分位だから5万本位かなあ？ ああ、これ以上減らさないためにも頭は極力弄らない様にしないとね。

「アアン……」

それにしても昼だったのに人っ子一人いやしねえ。確かに寂れた商店街っばいけどさ、店員位いるだろう。接客業舐めんよ。

『AAAAA……』

と思つてたら目の前には綺麗な姉ちゃん。ハハーン、さてはこのパチンコ店のバイトの子だな？ スカートから伸びる足にこびり付いた蛆虫のアクセがエロいね。

ドゴオ！

俺のワンパンを受けて姉ちゃんは倒れる。俺知ってるんだ。『コイツ等』は頭部の破損が弱点だった事を。折れてプラプラしてる右手を見て俺はため息をつく。

「オフウ」

シュワシュワと直っていく右手。何故頭髮以外は修復するのだから

うか。人間とは真不思議である。そういえば俺は頭部の破損すら修復出来る。これまた何故だろう？

さて。そろそろお気づきかと思うが俺は『普通の人間』ではない。というか『人間』ですらない。ああいや、厳密に言えば人間『だった』。そう、俺が死ぬあの日まで……。

って回想に入ると思ったかアホめ！ 何が悲しくて似非神との会話を思い出さなきゃなんねーんだ！ ふざけんなよあの糞小娘！ 生き返ったらゾンビで！ 転生したら『ゾンビ』って……！

「オオオアアアー！！」

慟哭。何故か壊れたはずの声帯から搾り出された俺の咆哮は人の子一人いない商店街に響き渡った。

さてさて。気分を入れ替えて俺は死都となった街を歩く。不慮の事故で死んだ俺はこうしてめでたく死人として生を受けた。……生きてるのか死んでるのか今一分からねーな。

「オウツオ？」

日も沈みかけてきた。『生存者』の活動は昼が中心だからそろそろ俺も拠点に戻るとしよう。

俺の城はとある女子高校の教室の一つ。いいじゃん、誰もいないんだし。ていうか性欲なんてもう無いし。死後くらい好きにさせる

よ畜生。

というわけでやって来ました我が根城こと桜坂女子高校。桜の下には死体が埋まってるとはよく言ったもんだ。うんマジで。

「アオーア」

1-Bの教室に敷いてある体育マットに横たわる。骨が折れないようにそつと。

「アンアア……」

窓から差し込む月明かりがとても綺麗だ。こんなに月が綺麗だと人肉も食べたくなくなるんだろうか。俺には『アイツ等』の事なんか分からない。

なんでこんな事になったんだろう。俺はアニメや小説、漫画や映画の世界に転生して美少女に囲まれて、迫り来る敵をバツバツサとなぎ倒す英雄になりたかったんだ。決してバツバツサとなぎ倒される側になりたかったわけじゃない！

「オガアア！」

ああ、思い出しただけでもかついてくる。あの自称神様カッコ笑いはいつか噛む。俺の甘い唾液を流し込んでゾンビにしてやる。顔は良かったから俺専用のゾンビペットにしてやるう。

でも自殺できねーしなあ。文字通り『不死身』だしなあ俺。会おうと思っても会えねーし！

俺は差し込む月明かりを見る。とても綺麗だ。俺だって、人間だった頃はそこそこカッコよかったし、子供の頃は綺麗だね、とも言

われた。それが本当にどうしてこうなった。

俺は絶対に人間に戻る。そのために、生きた人間を探す。そして俺には意思があつて狂つていない事を伝えるんだ！あとは政府とかなんかお偉い人とかが特効薬とかなんかさんなん作ってくれるだろうさ。

「オウ……オアアア……」

これが俺の今を生きる、いや、死んでる目的。絶対に人間に戻る。この、死者が蔓延り生き物が絶滅している世界で。そしてまた死んであの小娘を泣かす。俺はもう十分泣いた。涙なんて出なかつたけど、俺は絶対に泣いたんだ。

なあ、その位させてくれてもいいだろう？

俺の日課を紹介しよう。

「フアゝア」

多分朝の八時頃。まずは睡眠からの起床。性欲と食欲が無いのに睡眠欲が存在するのは、俺が人間を捨てたくない、と思う心の現われだろうか？知らんけど。

食事は必要ないので着替えを選ぶ。最早この世界で衣服なんてその必要性を失っているけど、生きた人間に出会った時に裸とかもうね。俺にまだ残ってる羞恥心がヤバイ。

「オ！」

今日はこれにしよう。黒い皮ジャンにジーンズ、そしてブーツ。最後にサンングラスをかければほら。どこからどう見ても知性を感じる事の出来るゾンビの出来上がりだ。……いやまあ、ファッションセンスはゾンビになってどこかに忘れちゃったんだ。

「ウォーン！」

そして俺は家を出る。場所が場所だから登校？ いや、出かけるわけだから下校？ どっちでもいいか。

とにかく俺は今日もこの町に残る生存者を探す。だけどアテが無いわけじゃないんだ。映画とか見れば分かると思うけど、ゾンビっていうのは俺と一緒に生きてきた人間を探す。そう、『食べる』ために目的は違えど、『奴等』も生存者を探している。つまり奴等が集まっている所に生存者がいる可能性が高いということだ。

「アウアウ？」

『OOAAA』

変な同属意識があつたもんだが、こと捜索にかけて奴等はすごい性能が高い。嗅覚とかその変が発達しているんだらうか？ 映画でも何故か生存者の集団にむらがるしな、アイツ等。

まあ、それは製作者、言わば神の意思なのかもしれない。となれば本物の（認めるのは癪だが）神がいるこの世界でもその法則は通用するのではないか？ 俺は一縷の望みをかけてゾンビの群れを同時に探す。



目の前にいたのはチャライ格好をしたゾンビが一人。生憎俺はこ  
ういう人種が嫌いだ。良い奴もいる、もとい『いた』のは知ってる  
が、中学生の頃にカツアゲをされて以来どうも好きになれない。  
だから俺は渾身の上段回し蹴りを放つ。

「アオツシャア！」

『A  
！』

派手に頭部を爆散させるゾンビA。

ゾンビになると筋力が増大する。

聞いた話によれば人間の本来出せる力は脳によってセーブされて  
いるらしい。本来の三割に近い力しか出せない生者と違ってこちら  
ら脳がぶつ壊れなさった死者である。単純計算2・3倍の力が出せ  
るわけだ。

「オギヨオオ！？」

すぐに破損する肉体はどうにもならんけど。攻撃力が上がって防  
御力が下がってちゃ意味ねーだろうに。

「ウグググアア……」

脛から太ももにかけて吹き飛んだ肉がシュワシュワと修復されて  
いく。あれか、転生特典の不死身ってやつ？ いや死んでるけどね  
！ ゲイゲイ死んでるけどね！

お昼。多分。

ゾンビは吸血鬼とかと違って昼でもガッツリ行動する。社会人か。

暇がボロボロなので日光が眩しいのが嫌だなあ。

ともあれ俺は生存者とゾンビの群れを探す。ここら一体を搜索し始めてはや三日。未だ目的は果たせずにいる俺。もしかしてこの町はもう無人（生きてる的な意味で）なのだろうか？ そろそろ拠点を移動させるべきであろうか。

「ウムオン」

首を傾げ考える。そうだな、今日見つからなかったら、隣町に移動しよう。そして段々と首都東京へと近づいていこう。多分いるだろ。

『GOOOAAA』

「アウ？」

出た。また出た。ゾンビB。今度はオバサン型である。

ちなみに。搜索者として性能の高いゾンビであるが、俺は単体のゾンビを見かけたら抹殺する事に決めている。生存者を探すためにゾンビを放っておくとか本末転倒だしね。魂の入っていない抜け殻にかける容赦も情けも俺には無い。俺にあるのは死と神への仕返しだけだから。

「キョアア！」

『G...』

オバサンすまない。アンタの頭は俺の正拳突きで木っ端微塵だ。そろそろ罪悪感も感じなくなってきた。最初はおっかなびっくり棒とかで始末してた三日前が最早懐かしい。

夕方である。結構遠出したのでもうそろそろ返らないと眠くなる。……なんでだろう？

ともかく俺は踵を返す。商店街で拝借した地図とコンパスを頼りに女子高への帰路へ着く。GPSなんていう便利な機械は役に立たない。管理する人間がいねーんだもん。

「アウーム」

これでこの町の要所はほとんど搜索を終えた。結果、ゾンビ数十体を抹殺するだけだった。となればいよいよ明日はお引越した。俺の桜坂女子高と別れを告げ、隣町へと移動しよう。旅なのに旅費もかからず、食べ物も必要ない。エコだ、エコすぎる！ 財布に優し  
いぜ本当。

「ウムムム」

帰宅した俺は地図と睨めっこ。隣町はデカイ。そしてアレがある。そう、

「オーイウオオオア（ショッピングモールが）！」

最早お約束の人類最後の拠点。数多くの雑貨品や生活用品が用意された理想郷である。アルカディア

俺は満月となった夜空を見上げ、最後の女子高の匂いを堪能しながら眠りに着く。まあ嗅覚ねーけど。

満月は、生者にも死者にも等しくその優しい光を浴びせてくれる。なんて平等だろうか。俺は月が好きだ。あったかい月が好きだ。日の光も好きだ。太陽が好きだ。でも、俺はこの世界が大嫌いだ。

だってさ、俺、独りぼっちじゃん。

【俺】（後書き）

のんびり更新します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0532z/>

---

Zombie@Lonely

2011年12月2日00時51分発行